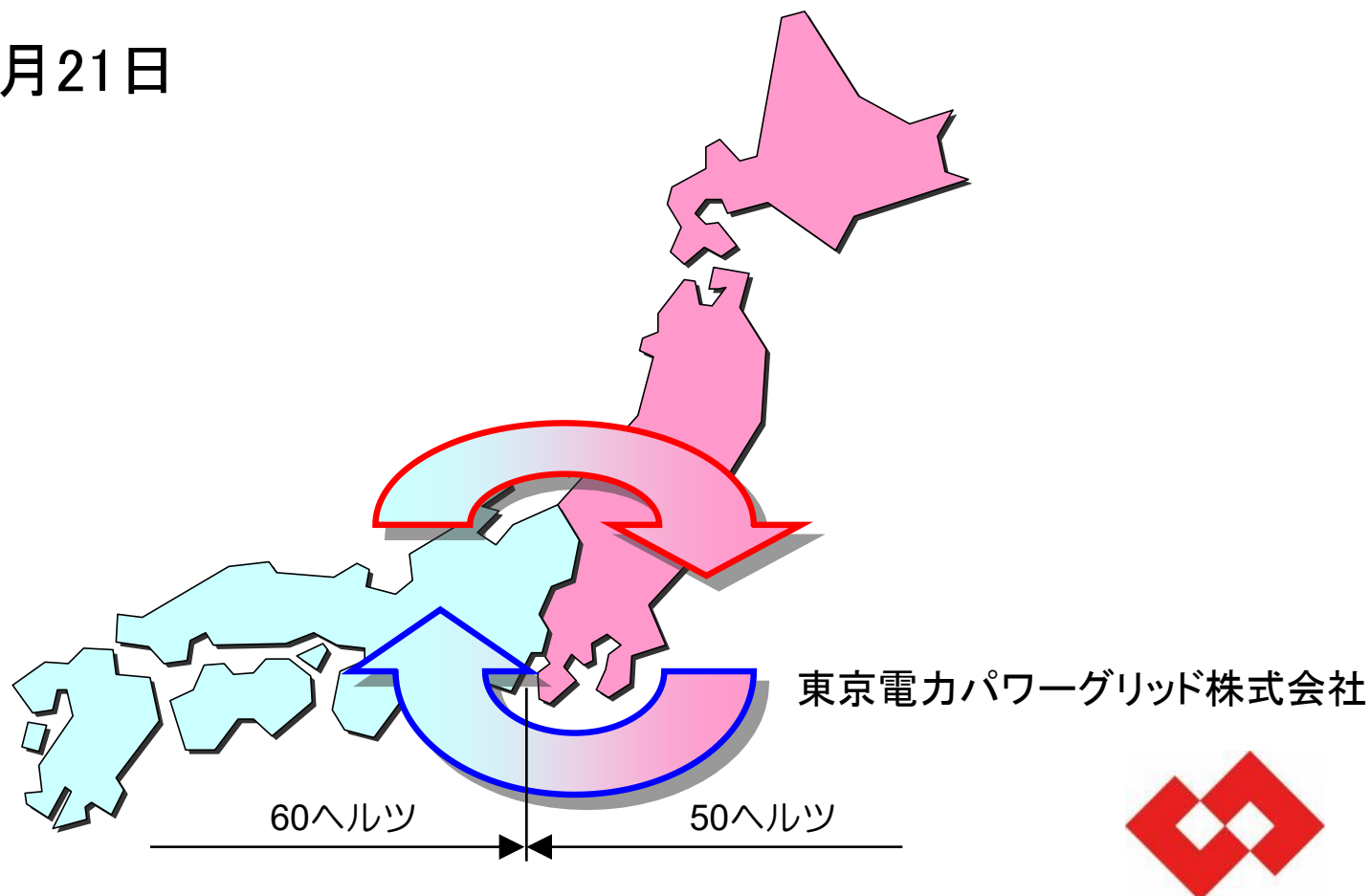


東清水線新設工事事業 環境影響評価 中間報告書 技術審議会資料【公開版】

2025年10月21日



中間報告書説明内容

＜前半＞ 資料①

はじめに（環境影響評価手続の経過）

1. 事業の概要
2. 事後調査の項目
3. 陸上植物の事後調査結果等

＜後半＞ 資料②

4. 陸上動物・生態系の事後調査結果等
5. 水生生物の事後調査結果等
6. 環境保全のための措置の再検討

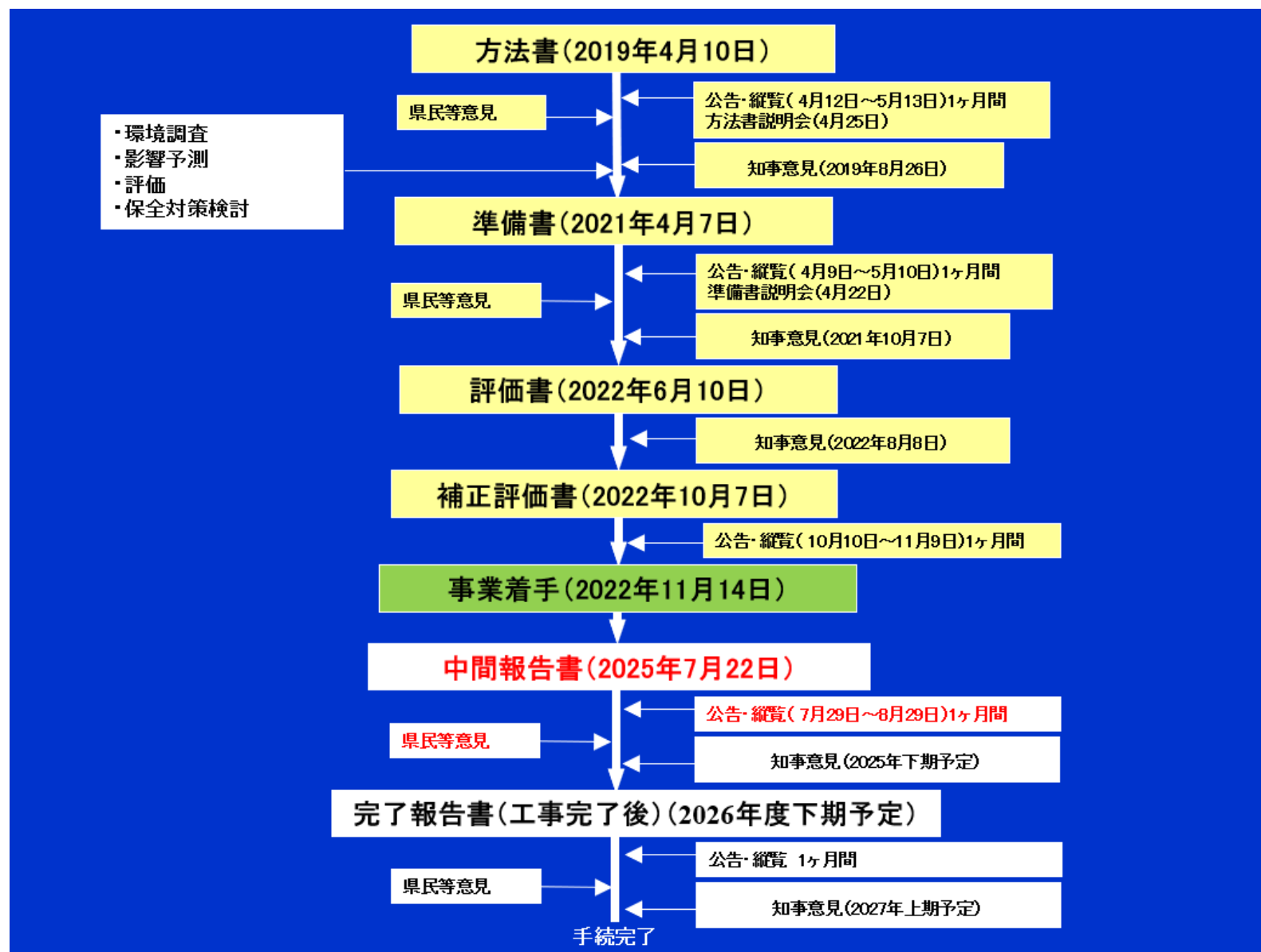
＜非公開＞ 資料③

7. 陸上動物・生態系の事後調査結果等



はじめに(環境影響評価手続の経過)

資料①



1. 事業の概要

1-1. 事業計画の概要

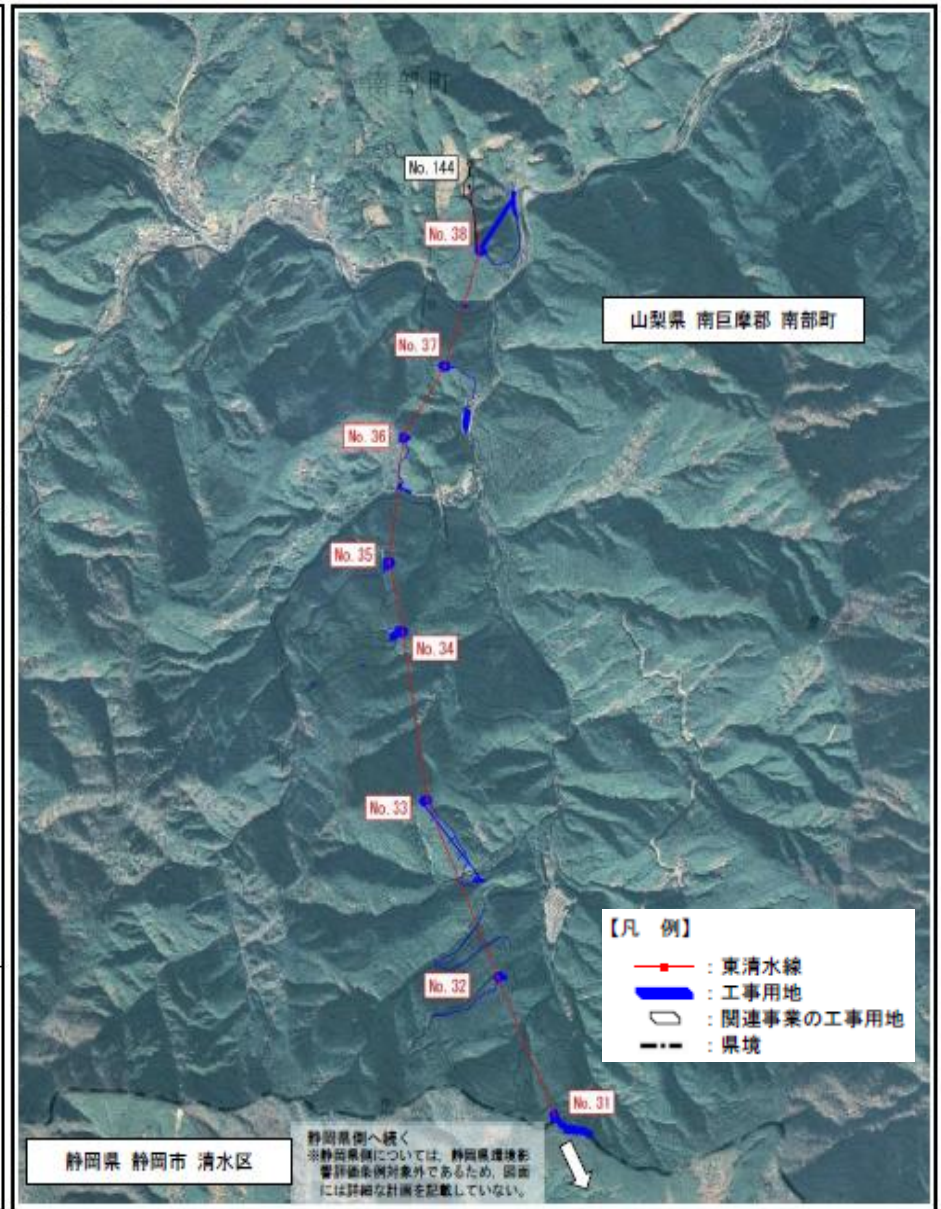
中間報告書 p.1-6

項 目	内 容
名 称	東清水線新設工事事業
区 間	自) 東京電力パワーグリッド(株) 154kV富士川線(静岡県静岡市清水区) 至) 電源開発(株) 275kV佐久間東西幹線(山梨県南巨摩郡南部町)
電圧・回線数	275kV・2回線
送電線の亘長	12.0km(山梨県側:3.87km)
鉄塔高さ	61.0～80.3m
鉄塔基数	22基(山梨県側:8基)
経過市町村	山梨県南巨摩郡南部町 静岡県静岡市清水区



1-2. 対象事業実施区域

中間報告書 p.1-3、1-5



1-3. 環境影響評価項目の一覧

中間報告書 p.2-3～

環境影響評価項目の区分 環境影響要因の区分			工事による影響					存在・供用による影響	
			樹木の伐採	土地の改変	基礎の掘削	建設機械の稼働	工所用車両の走行	送電線路の存在	送電線路の稼働
環境の自然的構成要素の良好な状態の保持	大気汚染	大気質				▲	▲		
	悪臭	悪臭							
	騒音	騒音				▲	▲		
	低周波音	低周波音				▲	▲		
	振動	振動				▲	▲		
	水質汚濁	水質・地下水の水質・水底の底質		▲	▲				
	水象	水象							
	地盤沈下	地盤沈下							
	土壤汚染	土壤汚染							
	地形・地質	地形・地質							
	日照阻害	日照阻害							
	植物・動物	陸上植物	●	●					
生物の多様性の確保及び自然環境の体系的保全		陸上動物	●	●		●	●		
		水生生物		●	●				
	生態系	生態系の要素及び機能	●	●		●	●		
	景観・風景		▲	▲				●	
人と自然との豊かな触れ合いの確保	人と自然との触れ合いの活動の場						▲		
環境への負荷の量の低減	廃棄物・発生土				▲				
	大気汚染物質・水質汚濁物質								
	温室効果ガス等					▲	▲		
一般環境中の放射性物質	放射線の量								

●: 環境影響評価を標準的に行う項目、▲: 一般的な環境保全対策で対応する項目

1-4. 工事の実施状況

中間報告書 p.1-50

工事区分	2022年	2023年	2024年	2025年	2026年
仮設備工事					
基礎工事					
組立工事					
架線工事					
その他工事					

■ : 現時点の工事工程 ■ : 今後の工事予定

※中間報告書時点(2024年12月末)の状況

現在は基礎・鉄塔組立工事が全て完了、架線工事等を実施中であり、
2026年12月までに工事完了予定



2. 事後調査の項目

中間報告書 p.3-2

項目	事後調査名称	事後調査を実施する理由	調査時期
陸上植物	移植植物モニタリング調査	移植による環境保全措置を実施した保全すべき植物種について、移植後の活着率を確認するため。	工事中、年1回、対象種の開花期（ムカゴサイシンのみ開葉期）
	マーキング植物モニタリング調査	工事の影響（作業員による踏みつけ等）を最小化するためにマーキングを設置した保全すべき植物種について、工事の影響の有無を確認するため。	工事中、年1回、対象種の開花期
	移植地樹林環境調査	移植地周辺の樹林環境に工事による影響が認められないことを確認するため。	工事中、移植直後と工事完了時付近の2回



項目	事後調査名称	事後調査を実施する理由	調査時期
陸上動物	クマタカモニタリング調査	環境保全措置により影響ができる限り緩和されていると評価されたものの、クマタカの営巣地から1kmの範囲の一部及び高利用域の一部と対象事業実施区域が重なることから、工事に対する忌避行動の有無や利用域の変化の有無を確認するための定点調査を実施する必要があるため。また、営巣地や繁殖状況を把握するための林内踏査を実施する必要があるため。	工事中、年4回以上、1～8月の繁殖期
	ハヤブサモニタリング調査	環境保全措置により影響ができる限り緩和されていると評価されたものの、ハヤブサの繁殖期に妨害すべきでない範囲の一部と対象事業実施区域が重なることから、工事に対する忌避行動の有無や利用域の変化の有無を確認するための定点調査を実施する必要があるため。	工事中、年6回、2～7月の繁殖期
	ツミモニタリング調査	ツミの繁殖地が存在する可能性があり、繁殖地の位置によっては環境保全措置の追加検討を行う必要があるため。	工事中、クマタカ、ハヤブサの調査中に合わせて実施

※補正評価書に記載した陸上動物の「希少両生類①②」を対象とした事後調査は、環境保全措置において個体の移動を行わなかったため、実施していない。
(環境保全措置の内容はp.26参照)



項目	事後調査名称	事後調査を実施する理由	調査時期
水生生物	魚類モニタリング調査	環境保全措置により影響ができる限り緩和されていると評価されたものの、魚類の生息状況に変化がないことを確認する必要があるため。	工事中、年3回、5月（春）、8月（夏）、10月（秋）
	底生動物モニタリング調査	環境保全措置により影響ができる限り緩和されていると評価されたものの、底生動物の生息状況に変化がないことを確認する必要があるため。	工事中、年3回、1月（冬）、5月（春）、8月（夏）
生態系		「陸上動物」の「クマタカモニタリング調査」と同様	

※補正評価書に記載した生態系の「希少両生類①（特殊性）」を対象とした事後調査は、環境保全措置において個体の移動を行わなかったため、実施していない。
（環境保全措置の内容はp.26参照）



3. 陸上植物の事後調査結果等

3-1. 事後調査の概要

○移植植物モニタリング調査

移植による環境保全措置を実施した保全すべき植物種について、移植後の活着状況を確認した。



移植植物モニタリング調査の状況

○マーキング植物モニタリング調査

マーキング設置による環境保全措置を実施した保全すべき植物種について、生育個体数や工事の影響の有無を確認した。



マーキング植物モニタリング調査の状況

○移植地樹林環境調査

移植地周辺の樹林環境について、工事完了後の樹林環境と比較することを目的に、移植直後に樹林環境調査を実施した。



移植地樹林環境調査の状況

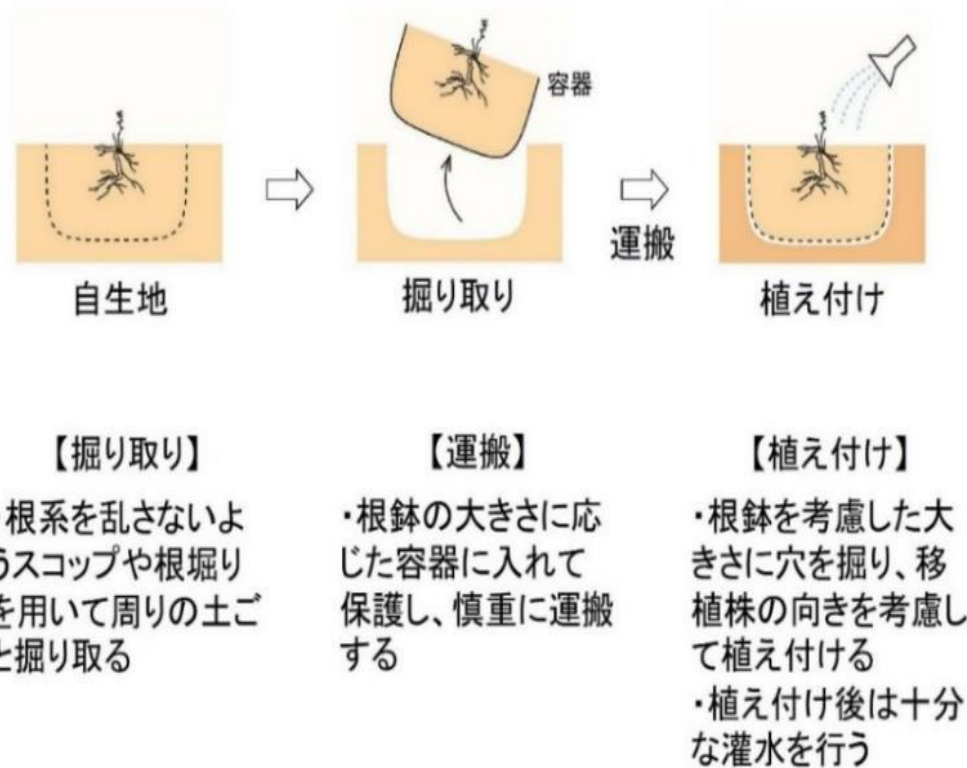


3-2. 環境保全措置

中間報告書 p.4-29～

○移植

対象事業実施区域内に生育する保全すべき植物23種への影響を代償するため移植を行った。



移植作業の状況

移植作業の手法



樹木のため移植困難なカラスザンショウは、採取した種を移植可能な大きさまで栽培した後、移植した。



栽培状況

○追加調査及び移植

運搬路としての使用を計画していた既設林道の一部が崩落し、代替の迂回ルートを新規に計画したため、工事前に保全すべき植物種の生育の有無を調査し、生育が確認された場合は即日移植を行った。



追加調査の状況

○マーキング

中間報告書 p.4-53～

対象事業実施区域近傍に生育する保全すべき植物について作業員による踏みつけ等の影響を最小化するため、マーキングを設置した。

また、作業員の工事区域外への不要な立ち入りを制限した。



マーキングの状況



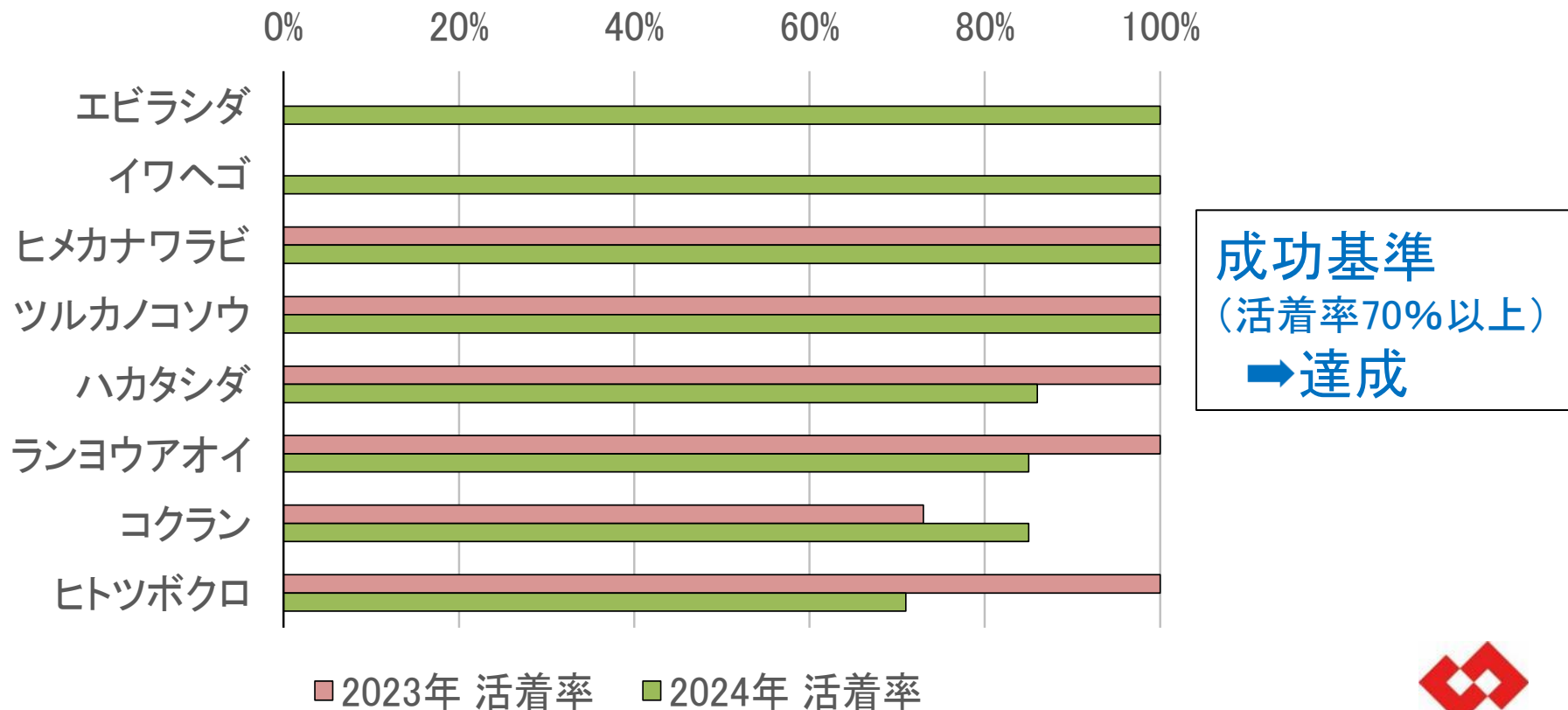
注意喚起の状況



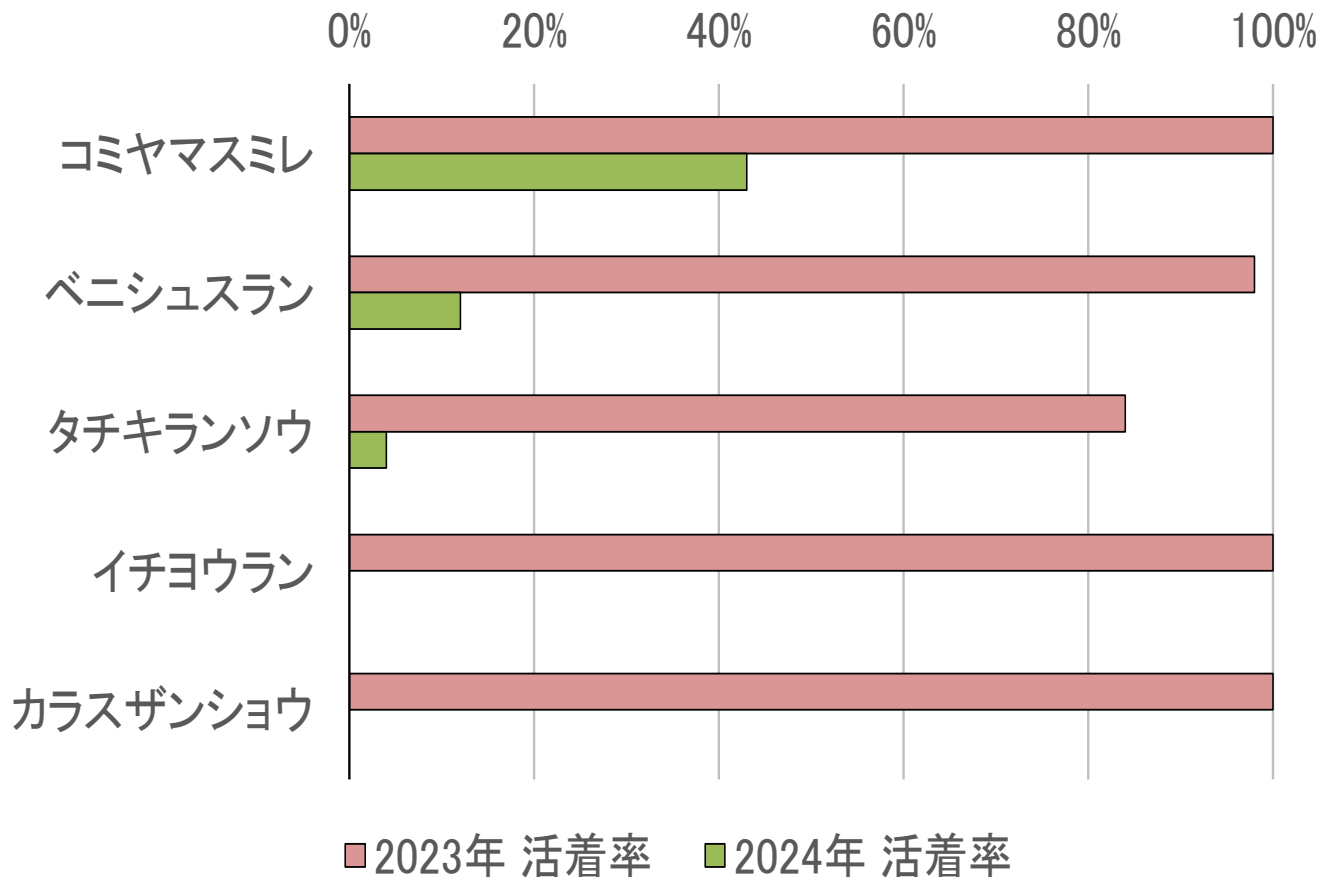
3-3. 事後調査結果と成功基準の達成状況

○移植植物モニタリング調査結果

エビラシダ、イワヘゴ、ヒメカナワラビ、ツルカノコソウ、ハカタシダ、ランヨウアオイ、コ克蘭、ヒトツボクロは、2023年、2024年ともに活着率が高かった(73%以上)。



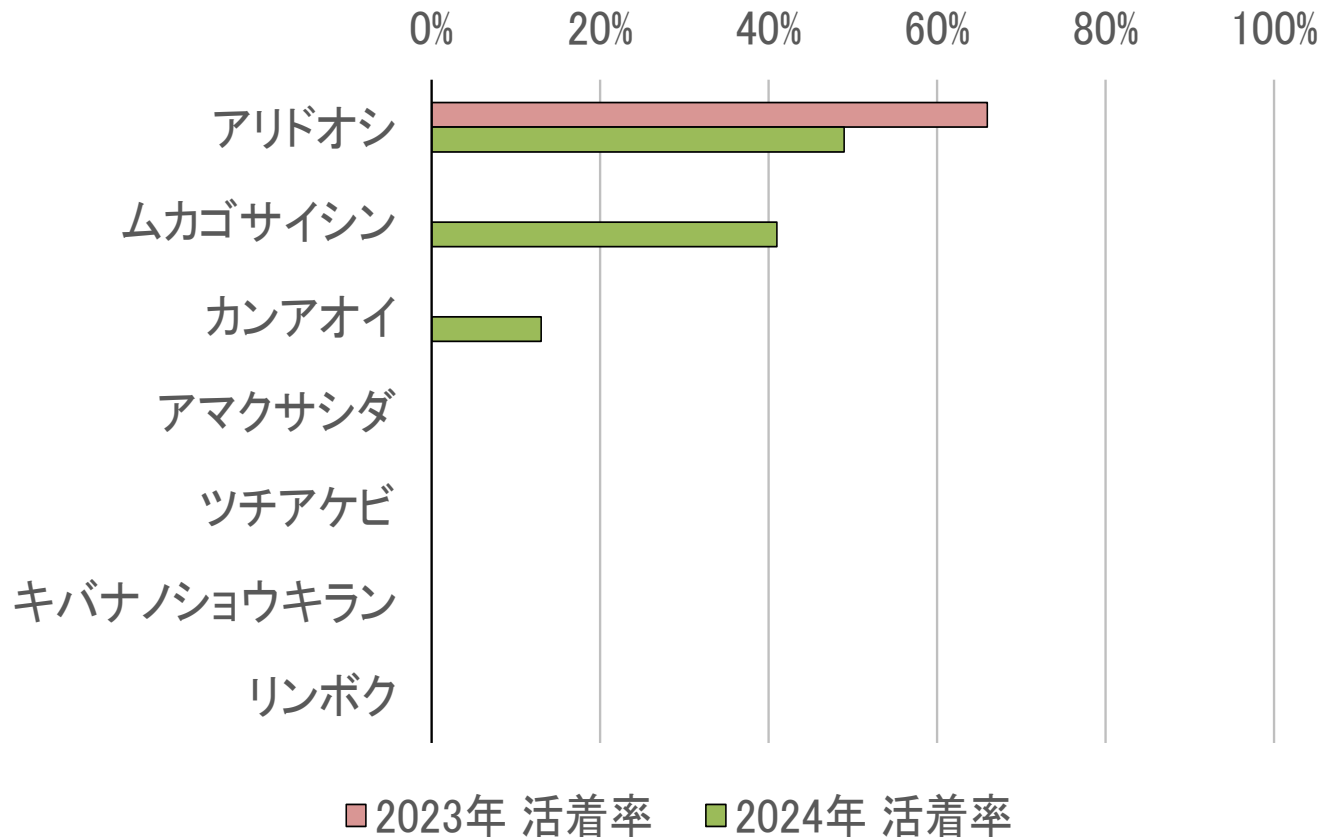
一方、コミヤマスミレ、ベニシュスラン、タチキランソウ、イチヨウラン、カラスザンショウは、2023年の活着率は高かったが(84%以上)、2024年に活着率が低くなった(43%以下)。



成功基準
(活着率70%以上)
➡未達成



また、アルドオシ、ムカゴサイシンの活着率は最初からやや低く（50%前後）、カンアオイ、アマクサシダ、ツチアケビ、キバナノショウキラン、リンボクの活着率は非常に低かった（13%以下）。



成功基準
(活着率70%以上)
➡未達成



○活着率が低かった種あるいは移植地について

移植地①では集中豪雨によるものと考えられる土壌侵食がみられた。移植したベニシュスラン及びイチヨウランの生育個体数が激減したことの要因として、根茎が比較的浅いこれらの植物が土壌侵食により流出した可能性が考えられる。



移植地①の土壌侵食の状況
(青矢印は侵食方向)



本事業地周辺はニホンジカが高密度に生息しており、林床植生が高い採食圧を受けて衰退している。

トゲで防御することでニホンジカの不嗜好植物とされているアリドオシの移植個体にも採食跡がみられたことから、移植個体のなかにはニホンジカによる食害を受けて消失した個体がいると考えられる。



移植地⑪のアリドオシ
(○印は採食痕)



菌従属栄養植物であるキバナノショウキラン、ツチアケビの移植地は、従属する菌が確実に存在する自生個体が生育する箇所を選定したが、2023年・2024年ともに事後調査では、移植個体のみならず自生個体の生育も確認されなかった。

自生個体も確認されなかったことから、気象条件等により移植地の菌自体が不活性であったことを要因として地上部を出さない休眠状態であった可能性が考えられる。



キバナノショウキランの移植地②



ツチアケビの移植地③



○マーキング植物モニタリング調査結果

全てのマーキング箇所で作業員が立ち入った跡はなく、工事による影響は認められないと判断され、工事前と概ね同様な生育状況であった。

- ・アマクサシダ1箇所／工事前15個体から19個体に増加し、ソーラスが形成されていた。
- ・アマクサシダ1箇所／工事前5個体から4個体にやや減少した。工事前からソーラスが形成されない未熟な個体である。
- ・コモチシダ1箇所／工事前5個体から9個体に増加し、ソーラスが形成されていた。
- ・カナクギノキ1箇所／工事前同様に1個体が生育し、開化がみられた。
- ・カナウツギ1箇所／工事前同様に12個体が生育していた。開花はみられなかったが葉の発生量等は正常であった。



例) アマクサシダのマーキング箇所
(2023年)



例) アマクサシダのマーキング箇所
(2024年)

成功基準
(工事作業
による影響
が認められ
ないこと)
→達成



4. 陸上動物・生態系の事後調査結果等

4-1. 事後調査の概要

○クマタカモニタリング調査

工事に対する忌避行動の有無や利用域の変化の有無を確認するための定点調査、繁殖状況を把握するための林内踏査を実施した。

また、クマタカの繁殖成功率に関するブナ科植物の落下種子を調査した。

○ハヤブサモニタリング調査

定点調査を実施した。

○ツミモニタリング調査

クマタカ、ハヤブサの調査に合わせて実施した。



定点調査の状況



林内踏査の状況



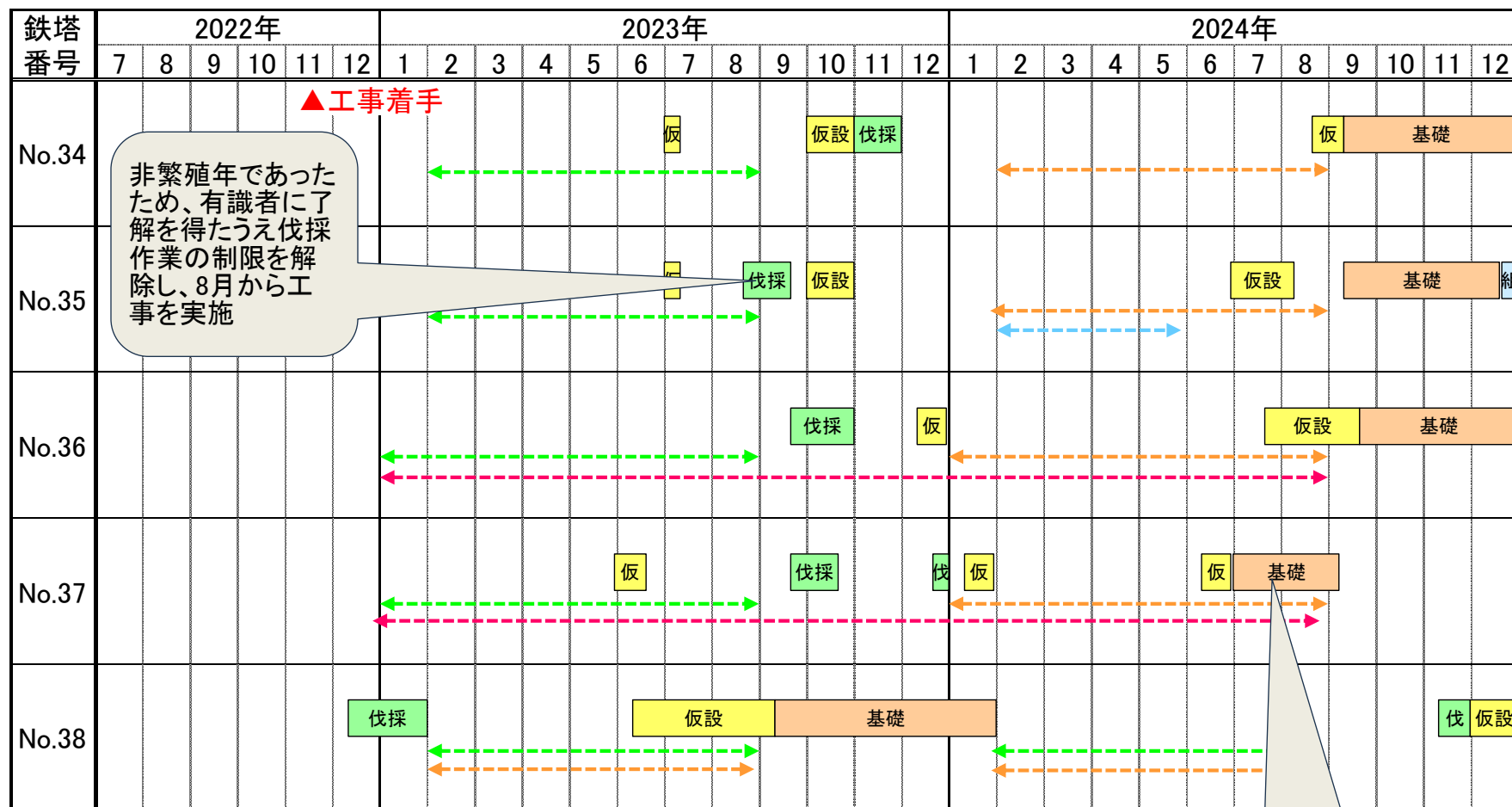
落下種子調査の状況



4-2. 主な環境保全措置

○工事制限の実績(クマタカ)

中間報告書 p.4-58



【凡 例】

伐採
仮設
基礎
組立

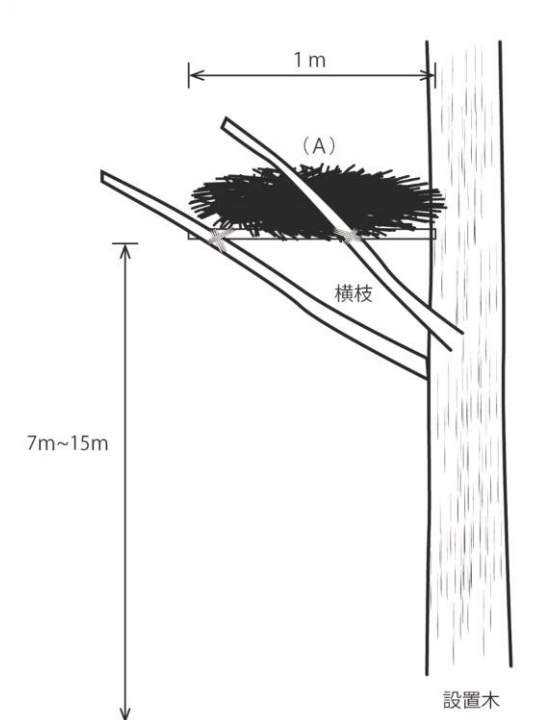
:伐採作業
:仮設工事
:基礎工事
:組立工事

←→ :伐採作業の制限期間
←→ :基礎工事の制限期間
←→ :組立工事の制限期間
←→ :主要な工事のコンディショニング期間

非繁殖年であったため、有識者に了解を得たうえ基礎工事の制限及びコンディショニングを解除し、7月から工事を実施

○人工巢の設置(クマタカ)

影響が及ばない箇所へ営巣地の誘導を図ることを目的に人工巢を2箇所を設置した。



製作した人工巢



人工巢の設置状況

○工事制限の実績(ハヤブサ)

中間報告書 p.4-61

鉄塔 番号	2022年						2023年												2024年											
	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
No.35																														

【凡 例】

伐採
仮設
基礎
組立

:伐採作業
:仮設工事
:基礎工事
:組立工事

←---→ :伐採作業の制限期間
←---→ :基礎工事の制限期間
←---→ :組立工事の制限期間



○工事制限の実績(希少両生類①②)

【凡 例】

伐採	伐採作業
仮設	仮設工事
基礎	基礎工事

←---→ : 仮設工事(伐採作業含む)の制限期間

○工事前の生息確認調査(希少両生類①②)

中間報告書 p.4-79～

鉄塔番号等	2022年			2023年												2024年			
	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4
No.31											●								▲
No.32	●							●				●			▲				
No.33	●							●		▲									
No.34												●	▲						
No.35	●							●		▲									
No.36											●	▲							
No.37											●	▲							
No.37～38間	●											●							
No.38	●		▲																
残土処理場①	●																		
残土処理場②	●											●							▲
残土処理場③											●	▲							



【凡例】 ●:調査実施、▲:工事開始

注1) 残土処理場①は使用を中止したため、工事は開始しない。

注2) No.37～38間は中間報告書時点では工事を開始していない。

※工事前の生息確認調査の結果、希少両生類①②の生息は確認されず、個体の移動は行わなかった。このため、個体の移動先で行うとしていた事後調査は実施していない。



調査の状況

4-3. 事後調査結果と成功基準の達成状況

中間報告書 p.4-113～

○クマタカモニタリング調査結果

①-1 2023年繁殖期の状況

1～3月にかけて求愛ディスプレイ等の繁殖に係る行動が確認されたが、同時に2021年産まれの若鳥が営巣地周辺にとどまっていた。3月には巣Y1bで造巣が確認されたが、4月には抱卵しておらず、本年の繁殖は行われなかった。

繁殖が行われなかった理由としては、3月まで営巣地周辺にとどまっていた若鳥の存在が挙げられる。

なお、工事に対する忌避行動はみられていない。

成功基準(工事に対する忌避行動が見られないこと) ➡ 達成



確認された若鳥



造巣された巣Y1b

①-2 2024年繁殖期の状況

1～3月にかけて求愛ディスプレイ等の繁殖に係る行動が確認された。3月には巣Y1bで造巣が確認され、繁殖が行われるものと考えられたが、4月には抱卵しておらず、本年の繁殖は行われなかった。

繁殖が行われなかった理由としては、前年のブナ科植物の凶作に起因する餌不足が考えられる。

なお、工事に対する忌避行動はみられていない。

成功基準(工事に対する忌避行動が見られないこと) ➡ 達成

中間報告書 p.4-120～



確認されたつがい



造巣された巣Y1b

①-3 人工巢の利用状況

いずれの人工巢においても設置時以降に新たな巢材の搬入が行われた形跡はなく、利用されていなかった。

2023年、2024年ともに既存の巢Y1bで造巢痕跡が確認されていることから、工事の影響等により既存の巢を忌避することではなく、人工巢を利用する必要がなかったと考えられる。



人工巢AN1



人工巢AN2



② 利用域の変化

工事前からクマタカの巣の位置に変化はなく、主要な行動は概ね営巣中心域及び高利用域内で行われており、利用域に変化はみられていない。

成功基準(利用域に変化が見られないこと)
➡達成

(経年の飛翔状況等は非公開資料で説明)



③ 経年の繁殖状況

これまで繁殖に成功したのは工事前の2021年のみである。

2021年に巣立った幼鳥が翌々年の2023年の3月まで独立・分散していないことが確認されており、これを要因として2022年及び2023年に繁殖しなかった可能性が考えられる。

また、繁殖しなかった2019年、2020年、2022年、2024年は前年のブナが凶作であり、繁殖しなかったことと関係がある可能性が考えられる。

事業段階	調査年	繁殖状況	使用した巣	ブナの豊凶	備考
工事前	2018年			凶作	
	2019年	×	Y1a(造巣)	凶作	前年凶作
	2020年	×	なし	並作～凶作	前年凶作
	2021年	◎	Y1b(繁殖)	凶作	
	2022年	×	なし	並作	幼鳥養育、前年凶作
工事中	2023年	×	Y1b(造巣)	凶作	幼鳥養育
	2024年	×	Y1b(造巣)	並作	前年凶作

【繁殖状況の凡例】 ◎:繁殖成功、×:繁殖せず

○ハヤブサモニタリング調査結果

中間報告書 p.4-134～

①-1 2023年繁殖期の状況

4月に抱卵行動が確認されたが、5～6月にかけて雛は確認されなかった。抱卵期以降に途中で繁殖に失敗したと考えられる。なお、工事に対する忌避行動はみられていない。



2024年6月のヒナと親鳥

①-2 2024年繁殖期の状況

4月に抱卵行動が確認され、6月に巣穴出口にとまるヒナ3個体を確認、7月に3個体の巣立ち幼鳥を確認し、繁殖に成功した。なお、工事に対する忌避行動はみられていない。



2024年7月の巣立ち幼鳥

成功基準(工事に対する忌避行動が見られないこと) ➡ 達成



② 利用域の変化

工事後は営巣地から南西側の利用がみられなくなっているが、主要な行動は概ね繁殖期に妨害すべきでない範囲内で行われており、利用域に大きな変化はみられていない。

成功基準(利用域に変化が見られないこと)
➡達成

(経年の飛翔状況等は非公開資料で説明)



③ 経年の繁殖状況

これまで繁殖に成功したのは工事中の2024年のみである。

2019年と2022年の調査では、抱卵期に営巣崖地をめぐって他の個体と争う行動が確認されており、メスが十分に抱卵できず、繁殖に失敗したと考えられた。

また、繁殖利用する岩穴を転々と変えていることから、卵が床面を転がるなど巣穴内部の形状の問題が要因である可能性も考えられる。

事業段階	調査年	繁殖状況	使用した巣穴	備考
工事前	2019年	△	左側	抱卵期以降に失敗
	2020年	△	中央	抱卵期以降に失敗
	2021年	△	中央	抱卵期以降に失敗
	2022年	△	中央	抱卵期以降に失敗
工事中	2023年	△	中央	抱卵期以降に失敗
	2024年	◎	右側	巣立ち幼鳥3個体

【繁殖状況の凡例】 ◎:繁殖成功、△:途中繁殖失敗

〇ツミモニタリング調査結果

中間報告書 p.4-155～

工事前と工事中の確認状況に変化なく、毎年1～2回確認される程度であり、繁殖に係る行動や確認が集中する箇所はみられていないことから、追加検討は行っていない。

事業段階	調査年	確認時期								合計
		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	
工事前	2019年									0
	2020年				1	1				2
	2021年								1	1
	2022年	2								2
工事中	2023年			1						1
	2024年				1				1	2
合計		2	0	1	2	1	0	0	2	8

成功基準（繁殖地が確認された際に追加検討が行われること）
➡達成



○生態系について

① クマタカ(上位性)

工事に対する忌避行動はみられず、工事前に繁殖した巣で、工事中の2023年・2024年ともに造巢行動が行われ、工事の影響から既存の巣を忌避してしまうこともなかった。また、利用域にも変化はみられなかった。これらのことからクマタカを上位とした生態系の捕食・被食関係の多くの種への変化も生じていないと考えられる。

成功基準(工事に対する忌避行動が見られないこと、
利用域に変化が見られないこと) ➡ 達成

② 希少両生類①(特殊性)

工事用地で生息が確認されず、詳しい生態が明らかになっていない本種に対する予測結果の不確実性が減少した。山梨県内での分布が非常に限られる本種をめぐる特殊な生態系は保全されていると判断される。

成功基準(追加調査が行われ、
予測の不確実性が減ること) ➡ 達成



5. 水生生物の事後調査結果等

5-1. 事後調査の概要

○魚類モニタリング調査

魚類の生息状況を確認する調査を実施した。



投網の実施状況

○底生動物モニタリング調査

底生動物の生息状況を確認する調査を実施した。



小型定置網の実施状況



Dフレームネットの実施状況



トラバーネットの実施状況



タモ網の実施状況



5-2. 環境保全措置

水質汚濁防止のため、工事用地の改変に伴う発生土は袋に入れて保管した。



発生土の保管状況



5-3. 事後調査結果と成功基準の達成状況

中間報告書 p.4-159

○魚類モニタリング調査結果

①確認種及び個体数の変化

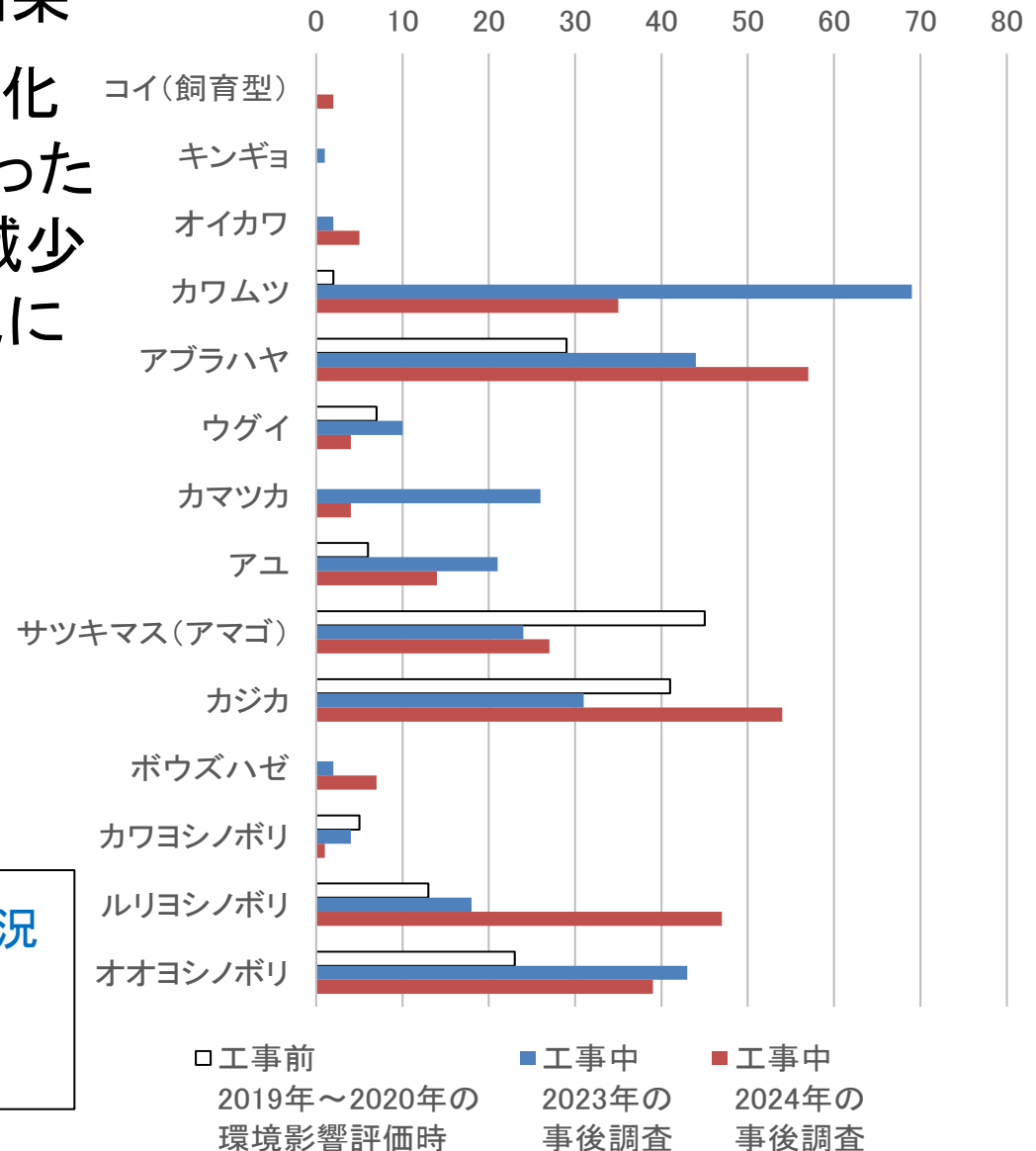
工事中に確認されなくなった種や著しく採捕個体数が減少した種はおらず、生息状況に大きな変化はない。

＜個体数が減少している種＞

- ・サツキマス(アマゴ)／警戒心が強い魚種で、採捕個体数は必ずしも採捕努力量に比例せず、この程度の個体数変化から減少傾向にあるとは言えないと考えている。
- ・カワヨシノボリ／工事前から生息密度が低く(10個体以下)、この程度の個体数変化から減少傾向にあるとは言えないと考えている。

成功基準(水生生物の生息状況に変化が認められないこと)

→達成



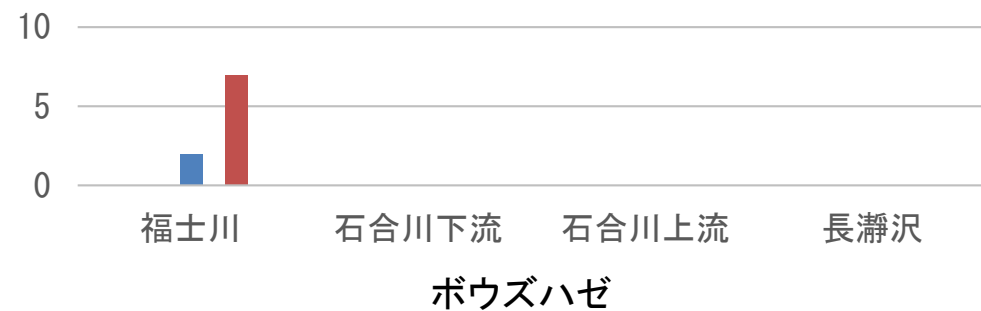
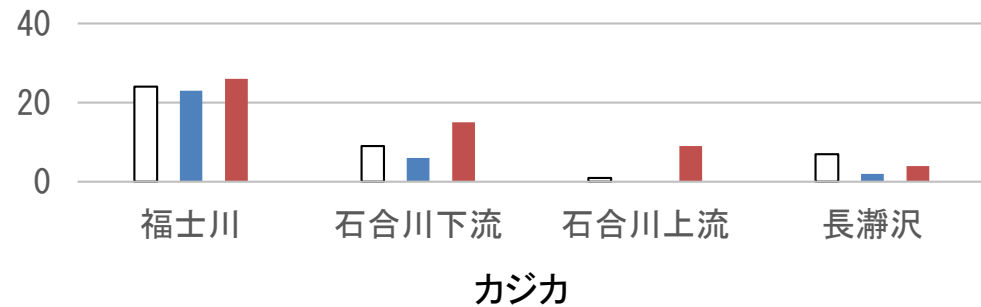
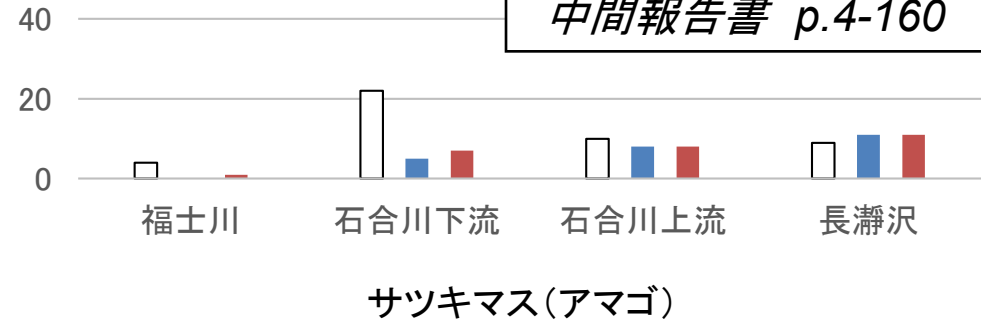
②保全すべき魚類の変化

- ・サツキマス(アマゴ)/工事前に全地点で確認され、工事中も全地点で確認。
- ・カジカ/工事前に全地点で確認され、工事中も全地点で確認。
- ・ボウズハゼ/工事前に確認されておらず、工事中に新たに確認された保全すべき種。

成功基準(水生生物の生息状況
に変化が認められないこと)

→達成

中間報告書 p.4-160



□ 工事前
2019年～2020年の
環境影響評価時

■ 工事中
2023年の
事後調査

■ 工事中
2024年の
事後調査

○底生動物モニタリング調査結果

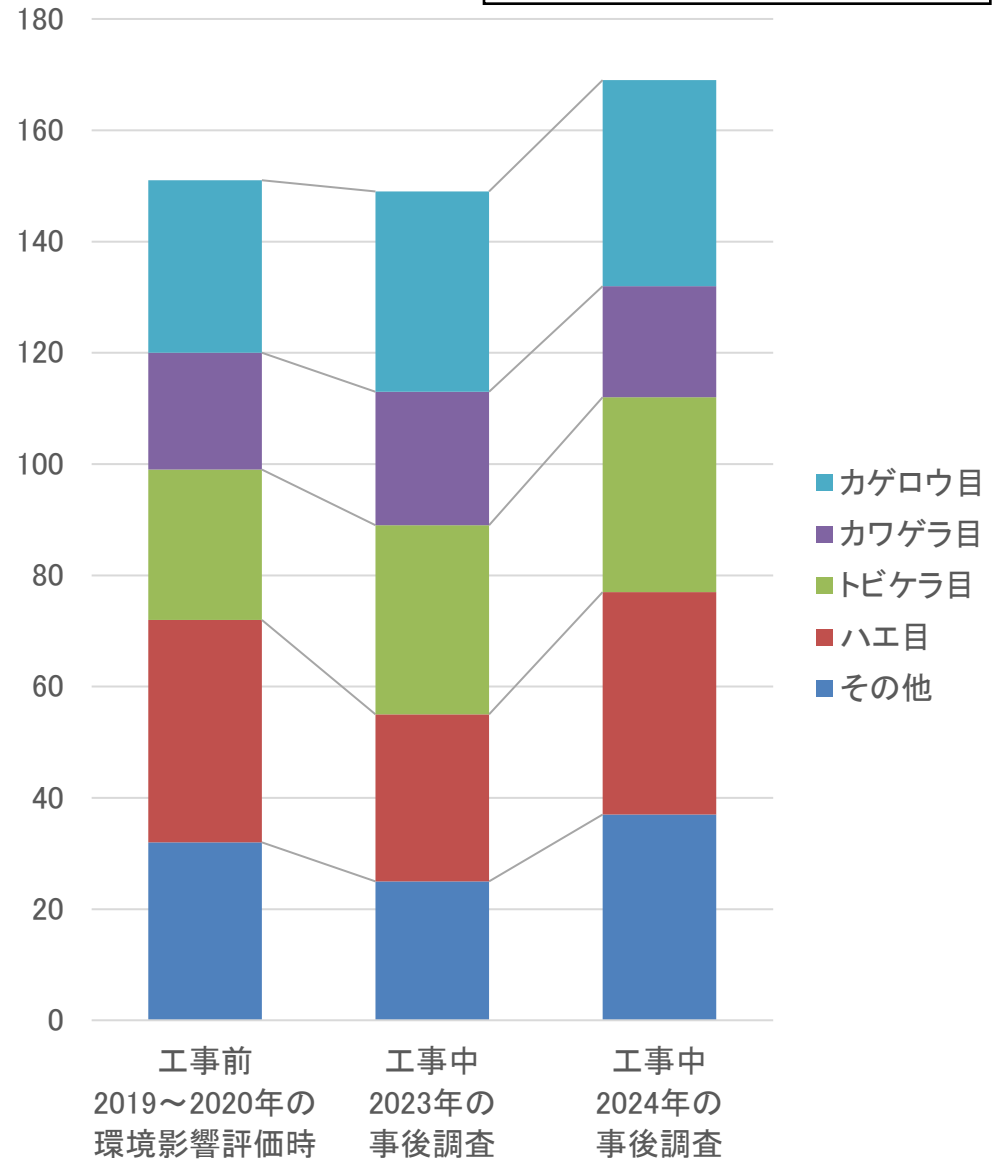
中間報告書 p.4-167～

①分類別種数の変化

カゲロウ目、カワゲラ目、トビケラ目、ハエ目の種数が多く、いずれの調査年においても、これら4目で全体の種数の8割程度を占め、生息状況に大きな変化はない。

成功基準(水生生物の生息状況
に変化が認められないこと)

→達成



②優占種の変化

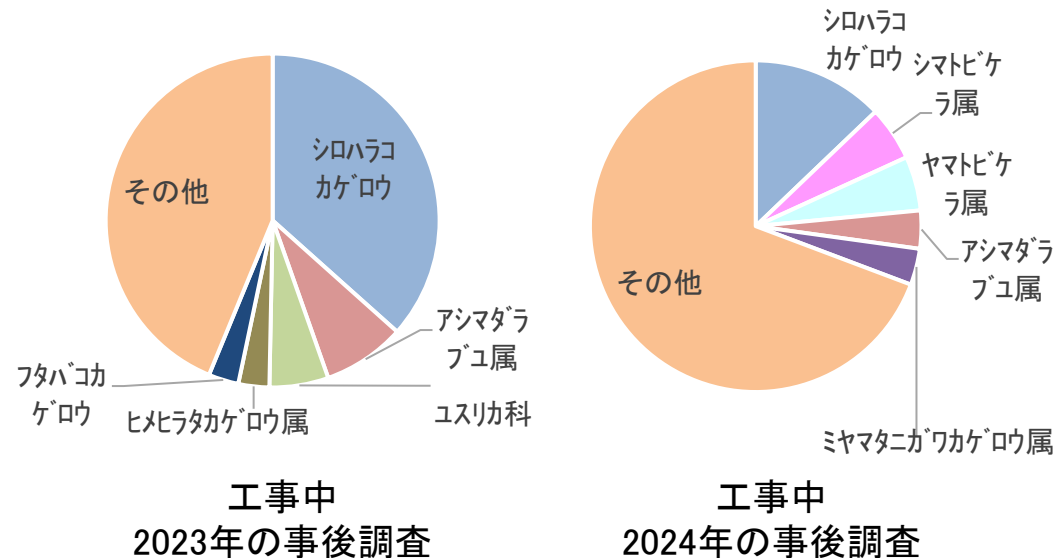
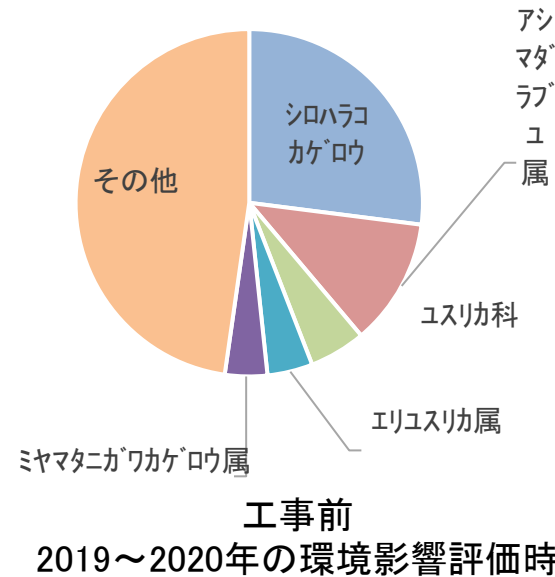
シロハラコカゲロウが最も優占(第1位)することに変化はなかった。

第2位以下は、アシマダラブユ属やユスリカ科がやや優占したことに共通点がみられた。

2024年はシマトビケラ属やヤマトビケラ属(造網性トビケラ類)がやや優占する変化がみられた。原因としては大きな出水がないことに起因する河床の固化が考えられた。

成功基準(水生生物の生息状況に変化が認められないこと)

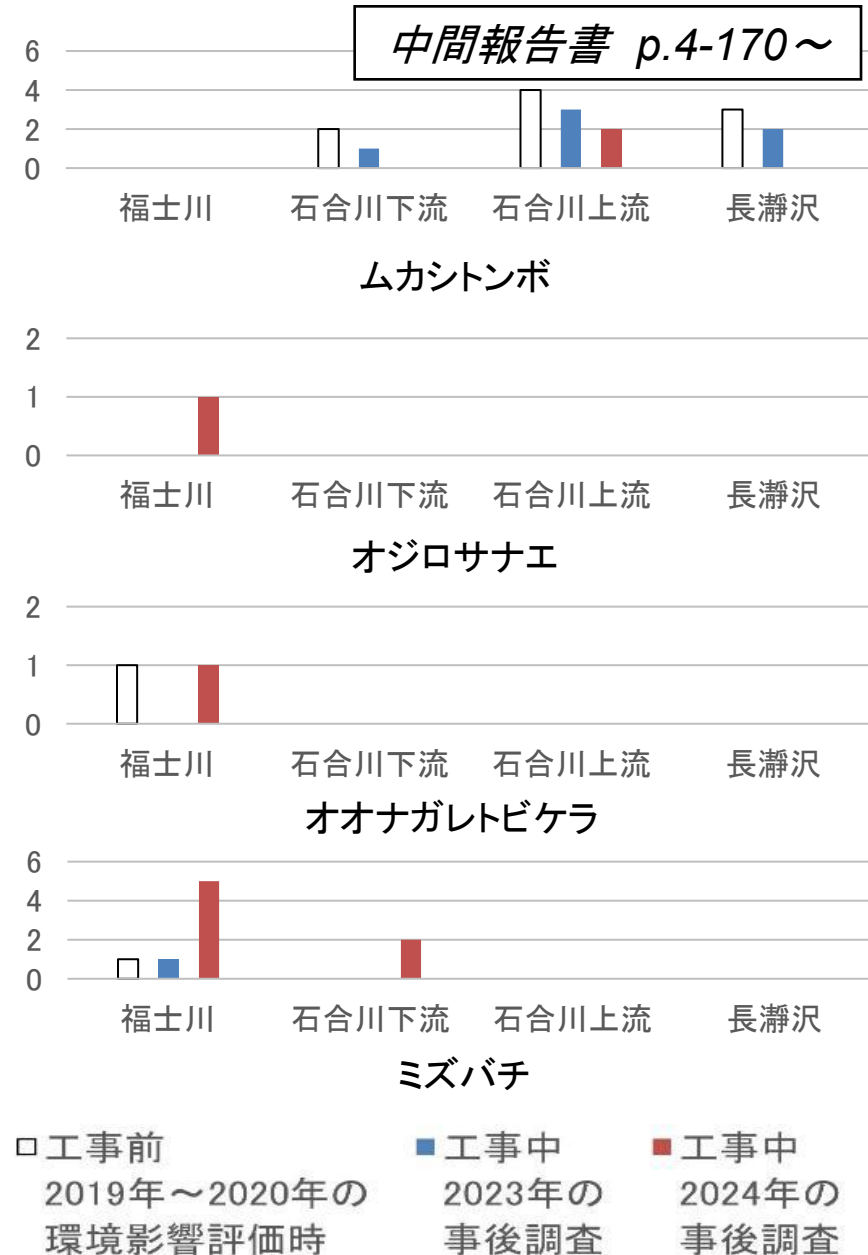
→達成



③保全すべき底生動物の変化

- ・ムカシトンボ/工事前に富士川を除く全地点で確認され、工事中も富士川を除く全地点で確認。
- ・オジロサナエ/工事前に確認されておらず、工事中に新たに確認された保全すべき種。
- ・オオナガレトビケラ/工事前の富士川で確認され、工事中も富士川で確認。
- ・ミズバチ/工事前に富士川で確認され、工事中も富士川のほか石合川下流でも確認。

成功基準(水生生物の生息状況
に変化が認められないこと) ➡ 達成



6. 環境保全のための措置の再検討

6-1. 検討結果

① 環境保全措置・事後調査・成功基準との比較で検討する項目

環境影響 評価項目	環境保全措置		事後調査の結果からの 成功基準の達成状況	見直し の必要
陸上植物	移植		保全すべき植物種8種の活着率は70%以上であり、 <u>成功基準を達成できている</u>	なし
			保全すべき植物種12種の活着率は70%以下であり、 <u>成功基準を達成できていない</u>	あり
	マーキング		工事作業による影響が認められておらず、 <u>成功基準を達成できている</u>	
陸上動物	クマタカ	工事制限、人工巢の設置等	工事に対する忌避行動が見られず、利用域に変化が見られないことから <u>成功基準を達成できている</u>	なし
	ハヤブサ	工事制限	同上	なし
	ツミ	追加検討等	繁殖地は認められておらず、追加検討を行っていないため <u>成功基準を達成できている</u>	なし
	希少両生類①②	工事制限、追加調査等	追加調査が行われ、予測の不確実性が減り、 <u>成功基準を達成できている</u>	なし
水生生物	発生土の適切な保管		水生生物の生息状況に変化は認められず、 <u>成功基準を達成できている</u>	なし

環境影響 評価項目	環境保全措置		事後調査の結果からの 成功基準の達成状況	見直し の必要
生態系	クマタカ (上位性)	工事制限、 人工巢の設 置等	工事に対する忌避行動が見られず、利用域に 変化が見られないことから <u>成功基準を達成で きている</u>	なし
	希少両生 類① (特殊性)	工事制限、 追加調査等	追加調査が行われ、予測の不確実性が減り、 <u>成功基準を達成できている</u>	なし

② 環境保全措置・成功基準との比較で検討する項目

環境影響 評価項目	環境保全措置	成功基準の達成状況	見直し の必要
景観・風景	伐採面積の最小化、改変 面積の最小化等	伐採面積の最小化、改変面積の最小化等の 措置が行われており、 <u>成功基準を達成でき ている</u>	なし



③ 一般的な環境保全対策で対策している項目

環境影響評価項目	対策後の状況	見直しの必要
大気汚染	補正評価書で想定したとおりであり、 <u>地域からの要望や苦情等は寄せられていない</u>	なし
騒音	同上	なし
低周波	同上	なし
振動	同上	なし
水質汚濁	同上	なし
人と自然との触れ合いの活動の場	補正評価書で想定したとおりであり、 <u>地域からの要望や苦情等は寄せられていない</u>	なし
廃棄物・発生土	補正評価書で想定したとおりであり、 <u>地域からの要望や苦情等は寄せられていない</u> 残土については土壌分析の結果、 <u>基準値以下であることが判明し、適切に処理している</u>	なし
温室効果ガス等	補正評価書で想定したとおりであり、 <u>地域からの要望や苦情等は寄せられていない</u>	なし



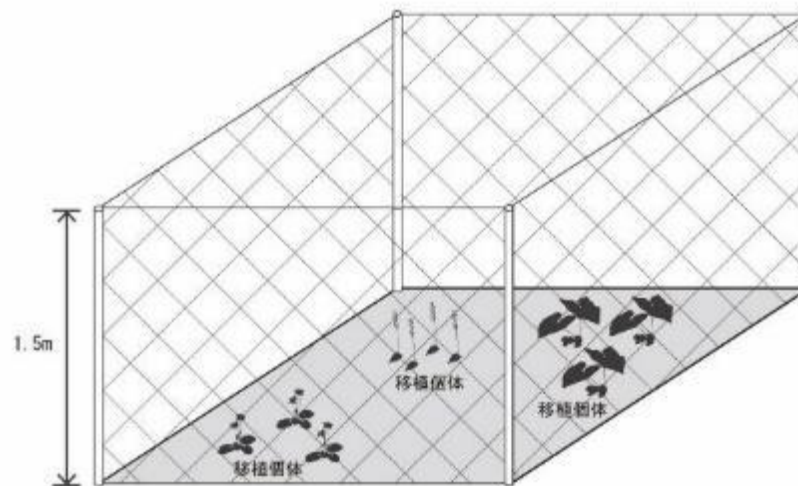
6-2. 陸上植物の環境保全措置の見直し内容

○要因

- ・移植地①で発生した土壤侵食
- ・移植地①、④、⑥、⑪、⑬、⑮、⑯で考えられたニホンジカによる食害

○見直し結果（追加の環境保全措置）

- ・移植地①の残存個体を再移植
- ・移植地①、④、⑥、⑪、⑬、⑮、⑯にニホンジカによる食害を物理的に防止するための柵を設置



食害防止柵の設置方法



以上、ご清聴ありがとうございました。

